

價值あるものは枝打するに止むるを得策とす。
 採集したる杉の枝葉は天氣快晴の日を選び、押切を以て、長さ一寸五分位に細断し、輕き槌を持ちて成るべく、叮嚀に叩き、針葉の青變するに至りて籠に詰込み、是れを杉葉粉製造人に賣渡す事あれども、自ら製造せんとするものは更らに一週間、席上に擴げて日光に乾かし、充分乾燥するを待つて是れを天井裏又は收納舎に貯藏する、事凡一箇月にして取出し、一日天日に乾かし、臼に入れて一晝夜搗けば針葉の細末を得べきを以て、是れを篩過して小石其他の夾雜物を除き、更らに絹篩にかけて精選せる杉粉を製造するを得べし。斯くして製粉したるものは紙の袋に詰め込み、更らに吠に容れて運搬す。一吠の重量は通常十貫乃至十五貫を以て適度とし、枝葉粉碎には水車を用ゆるを常とす。今山田村に於ける一駄(但し一駄は四十貫とす)の杉枝葉に對する收支計算表を示せば左の如し。

金額		品目	
四十錢	八錢	杉葉一駄の代	同上切賃
二十二錢五厘		同上粉碎見張人夫手間一人四十五錢とし牛人を要す	

十錢	計金八十八錢五厘
八錢	一四六十錢
六錢	計金一圓六十六錢
	差引純益金七十七錢五厘

諸器械及び建物損料
 荷裝用吠及び繩

杉粉二十貫代(一駄より二十貫を得るを普通とす)
 杉枝條代(太き枝は薪として賣却す)

第四節 檜繩すくり、しくり

檜の木繩は頗る強靱なるを以て諸般の用に供すれども、就中和船の錨綱、筏綱、及び釣瓶綱等とし、又倒木の曳起し、等にも使用するを得べし。和歌山縣東牟婁郡、大和國吉野郡、十津川村等より産出するもの多く、原料用の材は垂直にして、靱力に富み、無節にして年輪正しく且つ緻密なるを要す。胸高直徑三寸乃至六寸位のもの利用せらるる事多く、伐採後直に製繩するものありては季節を選定せざるも、貯材の必要を認むる時は八月より翌春三月迄を良しとす。貯材の方法は水中貯材にして、成るべく割裂に便にして纖維の切斷せざる事に努むるにあり。此關係より一年半以上貯藏するは良しからず。

杉檜に關する特種の製品及び効用

製作の方法は伐採したる檜材を長さ三尺位に切斷し、四つ割となし庖丁を持ちて割裂すべき部分に割目を入れ手にて割裂すべし。此際押鉋又は臺鉋を使用する事あり。此の外別にねすくりと稱して根部を利用し製繩の用に供するものあり、品質佳良なれども手数を要する事多きを以て稀に見るのみなり。

第五節 其他一切の効用

(一) 杉檜の樹皮の用途。

杉檜の樹皮は孰れも屋根葺用に供せらるゝ事多きも、檜の皮は杉皮に比すれば劣惡にして主として瓦下地に供し、其上等品にありては杉皮と同じく茶席敷寄屋等の天井に用ひ、壁を包圍し又は襖紙に張りて雅致に備ふる事あり。或は是れを粉碎して壁土に混入す、是れに用ゆる皮は檜の皮を良しとす、即ち檜皮は濃褐色にして美麗なる光澤を有するを以てなり。其他杉皮は是れを焼きて粉末となし、鶏卵の卵白に混入すれば金瘡火傷に有効なりと云ふ。飛州誌に據ればねこだと稱して檜皮を以て吠を編む事あり。

檜皮繩は筈まいはだまきはだとも稱し、檜の皮を以て繩に製し風呂桶、水桶、舟艇等の

罅漏を塞ぐに使用す。古來高野地方に於ては立樹の外皮を剥ぎて製繩に供し又は屋根葺用とせしが、近年其弊あるを悟り伐木確定區域にのみ行はるゝに至れり。現今副業として旺に行はるゝは廣島縣豊田郡大崎南村にして、専ら他地方より原料を仰ぎつゝあり。又近時海軍擴張と共に火繩用に供せらるゝを以て其の用途益々多し。杉皮も亦適用せられ、舊時東海道吉田驛に此の産あり。之れを杉火繩といふ。

(二) 杉檜材鋸屑の効用。

杉の鋸屑は酒樽に香氣を附する爲に使用する事あり。又醋酸製造用としては其需用頗る潤く、醋酸の利用擴張せられしを以て醋酸鹽類としての染料を始めとし、洗濯いんきの脱色劑其他漂白用として工業上注目せらるゝに至れり。實驗上針葉樹の鋸屑は潤葉樹の鋸屑に勝り、針葉樹と雖も軟材は硬材に勝り其製造高を増加するを以て、各地製材工場に於ける杉檜材の鋸屑を利用する事亦尠きに非ざるべし。又水の貯藏用、果物器具の運搬填充用、及び霜害豫防の目的を以て燻煙材料に供せらるゝ事あり。其他煉瓦製造に際し粘土に鋸屑を混じて焼けば、容積を増加し重量を輕減するの效あるは衆人の周知する處なり。然れども朽木縣鹿沼町白井助三郎氏が發

明せし炭團には實驗上杉の鋸屑は適當せざりしといふ。

(三)杉櫛材の製炭。

静岡縣山林會に於ては、明治四十五年春季同縣榛原郡木炭合業組合に囑託し、各種の樹木に就きて製炭試驗を行ひしが、其内杉櫛に關するもの次の如し。

第一回(伐木後十日を経て製炭す)

原木伐採期日、 明治四十五年二月二十七日。

竈詰込期日、 同年三月八日。

點火時間、 二時四十八分間。

炭化時間、 二十六時間。

消火時間、 十九時間。

口焚木の量、 九貫六百目。

第二回(伐木後直に製炭したるもの)。

原木伐採期日、 明治四十五年三月五日。

竈詰込期日、 同年三月六日、

點火時間、 四時十二分間、

炭化時間、 三十時間、

消火時間、 二十時間、

口焚木の量目、 十一貫二百目(使用したる粗桑は雨露を含み居)

即ち、其試驗成績を示せば左表の如し。

方 法	樹 種	原 本 年 齡	生 育 否 否	原 本 質 量	製 炭 法	周 圍		備 考			
						原 本 の 太 太 太 太	製 炭 の 太 太 太 太				
第一回	す ぎ	二〇	最 良	九、四〇〇	一、五〇	一、五〇	五、三	三、九	六、七	三、〇〇〇	適當の原木無き爲枝
第二回	す ぎ	一五	最 良	二、〇〇〇	一、一五	一、一五	四、一	三、九	三、五	三、〇〇〇	原木は幹生育不良
	ひ の き	二五	最 良	一、〇〇〇	一、一五	一、一五	四、二	三、六	四、三	三、〇	適當の原木無き爲枝
	ひ の き	二五	最 良	一、〇〇〇	一、一五	一、一五	四、六	四、二	三、七	三、四	適當の原木無き爲枝

以上の成績に據れば櫛の梢頭又は枝の太きものは炭材とするを得るが如し。

其他杉葉を用ひて松香油を製し清酒の出來たる時は杉の葉を釣して目標となす。

或は生垣とし、又は庭園に植ゑて愛用せらるゝものあり。近時盆栽として野生の風

杉櫛に關する特種の製品及び効用

姿を尊重するに至りしを以て、杉櫨の倍々賞觀せらるゝもの多し。

第四編 引書目録

- 一 大西鼎氏著 實用森林利用學上下
- 二 今景彦氏著 木の研究
- 三 月岡貞太郎氏著 廢材利用經木工業之折
- 四 林學博士諸戸北郎氏著 大日本有用樹木効用篇
- 五 林學博士諸戸北郎氏著 木材の性質
- 六 森庄一郎氏著 吉野林業全書
- 七 漆山雅喜氏著 日本伐木製材及運搬法
- 八 農商務省山林局編纂 木材の工藝的利用
- 九 大日本山林會報(大日本山林會)
- 十 第四三號 土井幹夫氏著 線香料杉葉粉解説
- 十一 第四八號 田中壤氏著 山林隨筆
- 十二 第一八二號 北山善臣氏著 線香原料の製造事業
- 十三 第二八四號 大西鼎氏著 杉材の瑕疵に就て
- 十四 第一三八號 林學士渡邊雅太郎氏著 木材の形態
- 十五 第三五八號 速水健次郎氏著 引本林業一斑

第三五五號 林學博士本多靜六氏著 杉心材の黒色なるものに就き
 10. 農業世界(博文館)

- 第六卷第一六號 布施仁藏氏著 曲物細工と材料
- 第四卷第一一號 林學士鈴木茂次氏著 鋸屑の利用法
- 第二卷第七號 林學士三村鐘三郎氏著 構寸軸木製紙原料
- 第四卷第四號 林學士鈴木茂次氏著 構寸軸木の話
- 第二卷第一三號 林學士鈴木徳二氏著 木材貯藏法
- 第二卷第一二號 農家副業案内(線香の製造、經木真田製法、鋸屑より蔞酸製法)
- 第三卷第六號 林學士安藤時雄氏著 杉材利用と著製造業
- 二 靜岡縣山林會報第十八號 製炭試驗成績比較
- 12 靜岡縣農會事務所發行 靜岡縣特種產物調査
- 13 大日本農會發行 茶業に關する調査
- 14 上平富吉氏著 鹿野林業誌
- 15 靜岡縣山林會報第三號 大井川中流千頭地方杉林收穫調査
- 16 林學士北村清治氏調査 吉野杉林收穫表

杉檜の造林經營終

附 錄

(一) 杉の奇木と其歴史

杉檜の老樹奇木は各地甚だ多からずと雖も杉は檜に比して此の類極めて多きが如し。余は數年來樹木と歴史との關係尠からざるを覺りて是れを研究せしが、其中杉に關するもの、二三を拔萃し、併せて各地の口碑傳説に據れる稀有の怪杉を列擧し以て讀者の參考に資せんとす。

一、良辨杉。

奈良の二月堂に良辨杉と呼べる老杉あり。其由來を原ぬるに、昔近江國志賀の郡に産れたる良辨僧正三歳の時大鷲に攫はれ行く處を知らず、其母大に悲みしが、時に南都の僧義淵春日に參詣し、圖らず彼の鷲の群衆に恐れて掴める小兒を放ちたり、據りて之を養育せりといふ。良辨杉は則ち鷲の巢なり。

二、土肥の大杉

湯河原温泉の北方二里相州足柄下郡土肥村に在り。傳へ云ふ昔源頼朝公石橋山に敗北し此樹の空洞に潜伏せし處なりと。成願寺の古墳土肥實平を追想せざるを得ず。大町桂月氏土肥の大杉の一節に。

腹張りて勇氣生じ、上るにつれてますく、加はれる寒氣ものともせずに進みゆく。杉の梢見え初むるに、勇氣益、生ず。杉の全體は近く前に見えながら、路の迂回するのもどかしく覺えつゝ、漸くにして大杉の下に達す。數百年の老杉也。よしやこれに、もとのまゝの空洞ありとも、史には伏木とありて、立木とは無し。頼朝がこれに忍びたりとは受取りがたけれども、頼朝の潜伏せしは、いづれ、このあたりなりけむ。杉山の名にても知らるゝ如く、むかしは、この山一面に杉がしけりしならむ。然るに今や草と箱根竹との山となりて、見渡す限り、杉は唯この一本のみ残れるは亦一珍ならずや。

三、矢立杉の古蹟。

箱根温泉案内を視るに、相州湯本の温泉の東方にある本道を東に進み三枚橋の下りに杉蹟ありと記さるゝに、一夏蘆の湯に遊びし時出掛けぬ。今は石碑を建て、之

を彰するのみ。聽く、昔戰將の軍陣に赴く時此樹下を過ぐれば表矢を射たりと。曾我兄弟の母虎女を伴ひ箱根の僧坊に到りし時、此樹の下を過ぎて國風を残す。

見るからに憂こそ増れ足曳の矢立の杉に残る紀念を

兄弟の母

常よりも又ぬれ添し袂かなあかぬ別の後の涙の

大磯の虎

四、一の戸杉。

福島縣耶麻郡一の木村内舊一の戸村の天然林は、是れ昔弘法大師の播種にかゝり、伐採すれば再び萌芽に據りて更新するを得べしと云ふ。惟ふに萌芽性の杉ありしを以て里人不思議に耐えず口碑に存せしものならん。

五、印の杉と雙本の杉

印の杉は大和國三輪山麓なる大輪神社の境内にありしが、安政年間落雷の爲に挫折せりと云ふ。三輪名勝の一に數へられ歌人の稱する三輪の杉三輪の檜原は此の附近なるが如し。

雙本の杉も亦同地の産にして其名高かりしも、惜い哉寶永年間大風に倒る。其一片僅に昔の面影を留めたりしに之れも亦明治十四年の秋暴風に挫折せられて、今は全

く其跡を絶てり。

六、箱根蘆の湖々畔及び湖中の奇杉

函山誌に據るに蘆の湖々畔及び湖中に種々なる杉あり。余も亦明治四十一年の夏季此地の杉を視察したるを以て是等を綜合して左に録す。

イ、箒杉。湖畔舊箱根村興福院の裏往還に在り、予が目測する處に據れば高さ十間、周圍八九尺に及び、枝條亂れて恰も箒を直立したるが如し。

ロ、鳥居杉。舊關所東廣路の端に在り。

ハ、一本杉。熱海街道にあり、以上の三樹は共に箱根往還七木の一に屬す。

ニ、五郎の力杉。箱根權現の石階を上げば、左側に周圍一丈餘の老杉あり、其根部をとたん板にて蔽へるを視るなるべし。杉は二株より成り、里人樹皮を剥ぎて守囊に納む、之れ即ち力杉なり。

ホ、姫杉。湖尻に在り、舊箱根村より舟行すれば右岸に二株の杉あるを視るべし、周圍四五尺に及ぶ。

ヘ、影向杉。夜宇可宇須紀と訓む、白川津の涯に在り、萬卷上人毒龍退治の時神の影

向せし古木なりと云ひ傳ふ。

ト、矢立杉。矢立杉の古木は枯れて今は存せず、今其名を傳ふる者は、今を距る三百年前伊豆山中より實生の苗を採集し茲に移植せりと云ふ。

チ、故杉。古須記と訓む、西方湖の落口とうご淵の水中にあり、周圍二丈七尺、木心空洞にしてさながら桶の如し。

リ、逆杉。野州鹽原に是れと同性の杉あり、然れども彼は丘陵に據り是れは湖中に存す、場所は湖尻に近くして長さ二十五間、水面に近く望觀するを得べし。

又、其他三本杉、鶴杉等をも存す。

七、日光の三本杉。

日光東照宮本殿の背後に三本杉と稱ふる神木あり。現今存立せるは中世よりの遺物にして稀有の老杉とは云ひ難きも、前の杉は神代よりの老杉にして周圍三丈餘に達せしと云ふ。

八、箒澤の大杉。

相州足柄上郡箒澤村に大小二株の老杉あり。大町桂月氏著「關東の山水」に此杉の記

事あり、即ち摘載すれば次の如し。

火にあたゝまりながら午食して歸路に就き箒澤村にいたる。中川右岸の小村落にして、かねて河内川流域の最奥の人里也。箒澤の大杉とて、このあたりに鳴りとゞろきたる杉の木あり。試に傍の家より繩をかり來りて、はかりたるに、六抱半ありき。之と竝びて可成り大なる杉あり。大さは三分の一ぐらゐなれど、高さはやゝまされり。思ふに親杉の方は數百年間孤立して風雨と闘ひし爲めに力をおもに根に用ゐて幹は高くは成れざりしなるべし。子杉の方は親杉の蔭に生ひたちたるを以て根よりは幹に力を注ぐことを得たる也。親杉ある間はよし。親杉なくば危き也。之を歴史上の人物にあてはむれば、平忠盛は親杉也。清盛は子杉也。清盛はまだ可成り根をはれり。宗盛に至りては、根の小さきひよろ／＼杉也。

九、ぬのぎすぎ(安産守杉)

宮地昌之氏曾て土佐の野根山に就きて研究する處あり。明治三十三年大日本山林會報に據りて公表せしが。其内ぬのぎ杉の由來を抄録すれば次の如し。

ぬのぎ杉は岩佐の西方里許の地にあり、圍數尋、儂佻蟠蜒地上を去る丈餘にして、空

奔數間、今は只木骨のみを存し外部の寄木一圍以上のもの相集りて舊態を抱持す、俗に安産守杉と云ふ此山を過るもの其木を削取し孕婦の守となす、往昔一孕婦の此山を過るあり、日没して豺狼の爲めに襲はる、遇々一士來る公用の飛脚なり、婦を擁して此杉上に據る、是れより群狼相負ふて逼る士之を斬つて退く、時に一老狼冠笠して襲ひ來るあり士亦之を斬る此に於て群狼圍みを解いて去る、翌曉血痕を探り南下し行けば佐喜濱一鍛冶の家に達す、何ぞ圍らん昨夜冠笠の狼は冶翁の妻なりしを士を見て咆哮一聲行く處を知らずと。

十、牡丹杉。

房州清澄山清澄寺南面の溪に一株の老杉あり。幹高十八間周圍七尺に及び枝條は疎にして翠蓋丸く點々古枝を交へたる態、牡丹の花に髣髴たり。

十一、千本杉。

千本杉は上總國山邊郡豊成村大字御門にあり。嘗て平親王將門自ら新皇と稱して此の地に帝村を造る。時に館の周圍に杉を植ゆ。今は僅に其二三株を残して跡を止むるに過ぎず。

十二、龍偃杉。

静岡縣引佐郡奥山村方廣寺にあり。方廣寺は半僧坊大權現を以て其名高し。龍偃杉は白崖峰、虎豹石、半鴈石、遊龍窟、抱腹岩、貝葉谿、玄聖關、靈仙洞、龜背橋と共に當寺十勝の一なり。

十三、大黒杉、惠比須杉。

新潟縣中蒲原郡上條村字拂川なる日光寺々中にありと云ふ、形狀大黒惠比須に似たるに據りて此の名起りたるならん。

十四、馬形の杉。

山形縣山形市を距る東北三里、東村山郡山寺村字山寺に寶珠山立石寺と稱する古刹あり。馬形杉は此の寺中に天生すと云ふ。

十五、毘沙門の大杉。

越後國高田の惣持寺境内に毘沙門の大杉とて頗る巨大なる老杉ありけり。馬淵基次氏記載を参照するに、周圍は頗る大にして男帶三筋を繋ぎて之を回すに猶四五尺も足らずと云ふ。

以上の外甲州には兩斑の杉、姥清水の怪杉、日蓮上人の千本杉等あり。又長野縣諏訪郡下諏訪町諏訪神社下社の根八の杉、東京府荏原郡六郷村の八幡太郎旗懸けの大杉等相次ぎて其名高きも檜の大樹を視る事至つて尠なし。然れども伊豆國修善寺の郷社に存立せしものは周圍一丈四尺二寸樹高十九間四尺五寸に及びしと云ふ。

(二) 杉檜に關する詩歌

杉檜は其樹姿松の如く雅致なく櫻梅の如く艶麗なる花を有せず。古來其莊嚴なる外觀的風姿を賞するよりも却つて實質的價值を認めたりしを以て、松櫻梅等の如く文學的材料に供せられたる事尠しと雖も三輪の檜原三輪の杉等と稱して歌人に唱導せられたるもの無きにあらず。左に杉檜に關する古今の名詠を掲げん。

(一) 杉の和歌。

古の人の植けん杉の枝に霞變く春は來ぬらし。	柿本人麿
いつしかも神さびけるかく山のほこ杉か許に苦むすまでに	鴨 足 人
神なひの神より板にする杉の思ひも過す戀のしけきよ。	讀人 不知
神なひのみもろの山にいはふ杉おもひ過めや苦むすまでに。	同

何れをかしるしと思はん三輪の山ありとしあるは杉にぞ有ける
 うき雲の上に見ゆる山高みしげるひもとの杉の梢は。
 同 貫之
 同 人
 讀人不知
 國 信
 有 慶
 盛 方
 攝 津
 讀人不知
 定 家
 秋山光條
 神代杉
 埋れて世々へし杉の古木さへ堀いでらるゝ時もこそあれ。
 同 人
 社頭の杉
 み空ゆく雲をしのぎて神さぶるいかきの杉やいく世經ぬらん。
 久野宗照
 千早ぶる神代も今に残るらむあま雲かゝる杉の太木に。
 玉くしけはこれの山の神垣の夏もみにしむ杉のした風。
 清原言道
 箱根路や笠たつ露の涼しさに夏をわするゝ杉の下道。
 野田千秋

杉深き片山蔭の夕涼みよそにぞ過る夕立の空。

忠家 卿
 俊成 卿

(二) 檜の和歌

またぐひあらしの山の麓寺杉の庵に有明の月。
 権僧正公朝
 昔へのうへに松と柏とのおひん迄待んと契るいもつかしこさ
 柿本人麿
 昔へに有けん人も我事の三輪の檜原に騎し折けん。
 法眼慶算
 時しもあれ冬は葉間の神無月粗になりぬ森の柏木。
 讀人不知
 此とのはうへもとみけり咲くさの三つは四はに殿造りせり。
 同 上
 みもろ山三輪山みればこもりくの初瀬の檜原おもほゆるかな。
 同 上
 巻向の檜原にたてる春霞おほにしもは名のみこめやも
 同 上
 みもろつく三輪山みればこもりくのはつせのひばらたもほゆるかも。
 同 上
 いたくふりてもなきひはたやに菖蒲うるはしくふきわたしたる。
 同 上
 古郷の軒のひはだに草あれておはれ狐のふしどころかな。
 同 上

咏秋田杉

正木曲水

憶昔蓬祖業 國是用意深 以山爲寶庫 制撫重杉林 延袤六十里
 蜿蜒不知幾 天產雨露潤 參天自崑崙 良臣任保彌 補植垂規箴
 後凋幾百歲 伐木宜於今 十圍棟梁選 轟々數十尋 時運工事切

斧斤以時侵	採樵白雲外	丁々響青嵐	橋車運積雪	舟筏輪運雲
清緯多需用	輸出港灣海	十大林區裏	巨杉推羽陰	縣國富源瀨
年算鉅萬金	遺利眞無比	美材四方散	並催山林會	摺紳盛鐘臨
紹述厚生道	喚起子孫心	園遊添餘興	錯落麗人簪	新按風土曲
奏得大平音				

阿里山中作

後藤棲霞

阿里山與新高山隣接。拔海八千尺。森林地帶分爲二。其在六千尺之地者爲廣葉樹。則檜櫟也。其在七千尺之地者爲針葉樹。則檜也。大抵長一百三十尺。徑二十尺。其數不知幾萬。嘗讀趙師北樹海歌。竊以爲文人誇張之言。今見此森林。始知師北歌不誇張。尤未盡形容。蓋自勘驗以來。實環地球所罕見者。

日光杉の石碑々文

自下野國日光山菅橋。至同國都賀郡小倉村同國河内郡大澤村同國同郡大桑村。歷二十餘年。植杉路邊。左右並山中十餘里。以奉寄進。東照宮。慶安元年四月平日松平右衛門大夫源正綱。右立之神橋也。

(三) 神代杉

神代杉の産地に就きては、既に總論に於て述べたるが如く丹波、若狹の海岸及び越後

相模、伊豆、駿河の各地に採掘せらるゝもの多く、就中駿河國駿東郡、伊豆國天城山附近に産出するもの品質良好なりといふ。伊豆國田方郡上大見村筏場より産するものは、地下二三尺乃至五六間の處より發掘せられ主として直立して埋没するもの多く、大概ね直径三四尺より一丈に及ぶ。明治四十五年一月愛知縣愛鷹山麓に於て神代杉を發見し當時伊神兼次郎氏は愛知縣農會報第百七十號に記載せし事あり即ち次の如し。

愛知縣下富士火山脈中に在る愛鷹山麓に於て神代杉發見されたのは今年一月中である。年輪を以て數ふるときは三千年に及び、當時の蛙、蛇、蕨等が神代杉に附着して出て來る事がある。發掘さるゝは獨り杉のみならず檜、樅、樺、山毛櫸等あり、此等の中最も高價に賣捌かるゝものは杉にして、發掘された當時の材は水分を含み重みを有するも乾燥すれば桐の數倍輕きに至る。色は初め白色なるも暫くして黒褐色となる赤味の部分がよいのである。神代杉は今の杉材より軟質にして年輪數は普通一寸幅に七八十を有し、罕には八九箇に止まるものあり、販路は東京、沼津、靜岡、名古屋、大阪等なるが、製材は關東方面は板目物、木理目物、關西は柱物が重寶がられる。實價は材の良否に依つて相違はあれど單價は才に由て計算される、即ち切口一寸四角長さ一間を以て才とし一才三十錢が普通である。

材の色澤は青色又は黒褐色を呈し美麗なる木理を有するもの優等品として稱讃せられ、黒色又は灰色を呈するものを劣等品とす。材の價額は品質色澤に依りて頗る不同なり。神代杉は雅致あるを以て茶席料理店等に遍く賞用せられ、天井板、障子の腰板、長押、欄間、落掛、木連格子等の建築用材を初め下駄材、箱材、經木等其需要尠からざるを以て、近年化學工業の進歩と共に人工を以て神代模擬材を製造するに至れり。曩に宮崎縣に於ては山林局林業試驗場に人造神代杉の製法を質問し山林公報(大正元年十月十五日發行第六號上)に發表せられたる事あり。以下參考の爲摘載すべし。

人造神代杉製法には著色法と泥中浸漬法とあり。

(一) 著色法。

A. 杉の心材に、重格魯謨酸加里二匁を水二十匁に溶解したるものを最初塗附し其乾くを待ちて第二回目には鐵粉五匁石灰五匁水二十匁の合液にて上塗して仕上ぐ。

B. 杉の心材に、鐵粉五匁石灰五匁砂二十匁水二十匁を混じたる液を塗附し、一夜放置して後ち之を仕上ぐ。

C. 杉の心材に、重格魯謨酸加里二匁を水二十匁に溶解せしものを最初塗附し、乾くを待ちて第二回目には灰を水にて少々固く溶きたるものを上塗して仕上ぐ。

D. あくたしと稱し、杉の心材に普通の灰に水を入れ少々固く溶きて塗附し、一夜放置して後仕上ぐ。

E. 杉の心材を石灰水に浸漬して造る。

F. 岐阜にて擬神代杉の下駄材にはねずこ材を用ふ。

(二) 泥中浸漬法。

杉の生木を板子大に挽き割り之を泥中に浸漬すること一箇月にして神代杉に劣髣たるべしと雖も、泥質は安母尼亞及び腐植土を多く含み、杉材はあくの強きもの程良質の擬神代杉を得らるゝなり。

(四) 杉檜種苗價格表

第一、杉檜種子價格表

種子の価格は年の豊凶精選の方法及び良否等に依りて大に差異あるは論を俟たず。即ち吉野の杉檜種子は平均一升並種子は七八十錢なるに、特選種子と稱する者は九十錢乃至一圓二三十錢にして、更らに杉の老樹種子と稱するものに至りては一升一圓五十錢に及ぶものあり。其他の地方に於ては大概一升五六十錢にて賣買せらるゝを視る。

(一) 東京に於ける價格表 其一

樹種	樹量	明治十一年	同十二年	同十三年	同十四年	同十五年	大正二年
す	合	一〇	〇八	〇七	〇六	〇八	〇六
ぎ	升	七五	六〇	六〇	五〇	七〇	四八
ひ	合	一二	一〇	〇七	〇六	〇八	〇六
の	升	八〇	八〇	六〇	五〇	七〇	四八
き	斗	六〇〇	七〇〇	五〇〇	四〇〇	六〇〇	三五〇

備考。

本表は東京園藝株式會社種苗木目録に依りて調製したるものにして價格は總て送料を含む。

(二) 東京に於ける價格表 其二 (種子一升到付)

樹名	明治十二年	同十三年	同十四年	同十五年	同十六年	同十七年	同十八年	同十九年	同二十年	同二十一年	同二十二年	同二十三年	同二十四年	同二十五年	同二十六年
す	五八	五八	—	六八	一〇八	五八	三五	—	七〇	五〇	五〇	五〇	五〇	六〇	四〇
ひ	六八	六八	—	七八	一八八	五八	三五	—	一三〇	六〇	五〇	五〇	五〇	七〇	五〇

備考。

本表は本多造林學本論の二種子及び苗圃の部より摘録せり。

第二、杉檜苗木價格表。

苗木の價格も亦大小良否及び需用供給の關係等に依りて高低を生ず。今各地の杉檜苗木價格の變動表を掲げて参考に資す。

(一) 駿河國安倍郡草薙地方最近十年間に於ける杉檜苗木價格一覽表。(苗木一萬本に付)

常陸國	久慈郡北部民有林 多賀郡一帯の國有林	小角、丸太、板類、丸太、板類	品質概して佳なり 花園國有林より美材を産す
相模國	酒匂川流域に僅かに存す		
伊豆國	大見中狩野方面 上河津方面 松崎方面	板類、角材	小許の美材を産す
駿河國	駿東郡須山村民有林 安倍川流域民有林	板類、角材、丸太材、板類、丸太材	板類角材は御厨方面丸太材は岩淵及大仁製材場に向く 志太郡徳山村民有林も特筆すべきものとす
甲斐國	富士川下流民有林	丸太、角材	
遠江國	榛原郡上川根村民有林 天龍川流域	長物丸太、板類、丸太材、同	
三河國	豊川本流及寒築川 矢矧川上流	板類、丸太、小角	主として豊橋に搬出す 岡崎に搬出せられ板類とす
信濃國	下伊那郡天龍川下流	丸太材、板類、貫	丸太材、板類
美濃國	恵那郡地方民有林		矢矧川筋に出づ
紀伊國	熊野川流域民有林(新宮材) 南牟婁郡の各部落(熊野物) 北牟婁郡の沿海地方(尾鷲物)	丸太、板類、小角、柿板、同上 丸太材のもの多し	主として新宮に出づ 熊野物より品質佳良

大和國	吉野川流域 十津川流域(十津川郷) 北山川流域(北山川郷)	樺丸、海布丸太、錢丸太、小丸太、洗丸太、磨極丸太	處に依り五條、和歌山、新宮に出づ
伊勢國	多氣郡、飯南郡	丸太材	松坂地方にて製材す
丹波國	桑田郡の一部 五ヶ荘、摩氣村方面	丸太材	京都に出づ、材質不良
羽後國	北部一帯の國有林	長大なる丸太、板類	
陸奥國	大鰐、碓ヶ關一帯の天然林	大物材	品質良好、遠州尾鷲物を凌駕す
陸中國	仙岩嶮西南方御所村 一の關方面		約六十八萬尺あり 幼齡人工造林あり
岩代國	田村、石川、白川、諸郡民有林 耶麻郡一の木村	板類、貫、小角	山元附近須賀川驛にて製材す
陸前國	玉造郡鬼首村自生山大森平國有林		約百町歩の天然林あり
上總國	君津郡秋元村(鹿野山神野寺々領)	古來造船用材を産す	長大なる良材に富む
國名	産地	材種	摘
武藏國	秩父地方 西川青梅地方	小丸太、小角物 小丸太、小角物	僅に産出す 昔時は國有林に蓄材多かりしも今影なし
			要

駿河國	富士川沿岸民有林 安倍川沿岸民有林	主として小角物、 板類、挽立材、小丸太、	
上野國	碓氷川、鑄川、流域	小角物、丸太材、	
甲斐國	富士川流域	小角物、	
遠江國	天龍川流域 大井川流域	丸太、小角物、 長丸太、並丸太、小角物、	栗代川流域に蓄材多し
信濃國	天龍川流域下伊那郡南半民有林	丸太材、小角物、	
三河國	豊川沿岸の民有林 矢野川流域	丸太材、小角物、	少量に産す
下野國	日光方面國有林及御料林 の原方物の中宇都宮佐野驛に出づるも	小角、小丸太材、	現今は狩獵地に編入せられたるを以て伐採せらるゝ者尠し
常陸國	民有林より僅かに産す	小角物、丸太材、	
紀伊國	熊野川流域 南牟婁郡の各部落 北牟婁郡沿海地方	小丸太、小角物、 小物の産出多し、 同上	小物の産出量に於ては全國第一と稱せらる
大和國	熊野川の上流大臺ヶ原山天然林 吉野川流域	丸太材、	昔時に比すれば蓄材量減退す し杉材多きが故に寧ろ副産物なるが如
伊勢國	民有林より僅かに産出す	小角、丸太材、	
丹波國	杉と共に各所に産出す	小丸太材、小角物、	

備考。

本表は主として山林公報(明治四十四年十月十五日發行第十九號)に記載せられたる建築材料としての本邦木材(工學博士妻木頼黄氏研究談)を參照して調製せり。

(六)最近十二年間に於ける杉檜植栽面積表

有別所	御料林	國有林	公有林	社寺有林	私有林	計	合計
明治卅三年度	四、四四・九	二、一九二・〇	九、三二・九	二、四四・三	三、七九・五	一、一三三・三	二、七九〇・〇
同卅四年度	三、五一・七	三、五〇一・六	一、三三二・九	四、一三三・八	三、九一・五	一、八六八・〇	四、七九六・一
同卅五年度	四、四九・五	五、一一一・六	七、九四二・五	四、七二二・八	三、〇二七・八	一、五〇九・七	五、三二二・九
同卅六年度	三、三三・七	六、〇九五・一	七、〇八二・五	四、二七六・八	三、七九一・五	一、一三三・三	四、九一三・六
同卅七年度	二、六六・六	七、〇八二・五	九、三二・九	三、七九一・五	三、九一・五	一、八六八・〇	五、三二二・九
同卅八年度	一、六五・七	四、三二・八	七、九四二・五	三、〇二七・八	三、七九一・五	一、一三三・三	四、九一三・六
同卅九年度	三、四一・六	六、七九八・八	七、〇八二・五	四、二七六・八	三、七九一・五	一、一三三・三	四、九一三・六
同四十年度	二、七一・四	七、七三〇・八	八、七〇〇・五	三、〇二七・八	三、七九一・五	一、一三三・三	四、九一三・六
同四十一年度	三、四一・六	八、七三〇・八	九、三二・九	三、〇二七・八	三、七九一・五	一、一三三・三	四、九一三・六
同四十二年度	二、五三・九	一、〇三三・四	七、七三〇・八	三、〇二七・八	三、七九一・五	一、一三三・三	四、九一三・六
同四十三年度	一、四八・二	九、五八八・二	八、四六九・八	三、〇二七・八	三、七九一・五	一、一三三・三	四、九一三・六
同四十四年度	一、七三・六	九、六九九・三	八、四六九・八	三、〇二七・八	三、七九一・五	一、一三三・三	四、九一三・六
總計	三、五三・四	八一、三三・五	一〇、八三五・五	四一、〇二・三	四、〇二七・八	三、七九一・五	一、一三三・三

所有別	御料林	國有林	公有林	社寺有林	私有林	計	合計
明治卅三年度	二八〇・七	七七七・七	一七三・二	七・七	一八・八	一、一八〇・一	一、一八〇・一
同卅四年度	三三二・〇	一、二八二・六	二、八〇八・七	七、七四七・九	一、八〇三・九	九、三三〇・五	九、三三〇・五
同卅五年度	三三六・二	三、一六三・八	二、八〇八・七	八、二四八・二	一、八〇三・九	二、四六九・〇	二、四六九・〇
同卅六年度	四二〇・九	四、一六三・四	二、八〇八・七	九、六八三・〇	一、八〇三・九	三、一三三・五	三、一三三・五
同卅七年度	五三三・八	四、九〇・三	二、八〇八・七	一、五五五・六	一、八〇三・九	三、八三三・三	三、八三三・三
同卅八年度	七四三・八	二、五五五・八	二、八〇八・七	一、八〇三・九	一、八〇三・九	四、五五五・八	四、五五五・八
同卅九年度	七三三・五	四、四七三・八	二、八〇八・七	一、八〇三・九	一、八〇三・九	五、二八三・八	五、二八三・八
同四十年度	一、一六三・一	四、六〇四・四	二、八〇八・七	一、八〇三・九	一、八〇三・九	六、〇五三・〇	六、〇五三・〇
同四十一年度	九七〇・二	六、七六六・二	二、九二九・〇	一、八〇三・九	一、八〇三・九	六、七六六・二	六、七六六・二
同四十二年度	一、〇七三・三	六、五〇・九	三、五五五・六	一、八〇三・九	一、八〇三・九	七、〇〇三・七	七、〇〇三・七
同四十三年度	七八六・八	八、一八・九	三、八四四・四	一、八〇三・九	一、八〇三・九	七、〇〇三・七	七、〇〇三・七
同四十四年度	九一九・一	八、八三五・八	三、九六七・五	一、八〇三・九	一、八〇三・九	七、〇〇三・七	七、〇〇三・七
總計	八、二九九・三	五六、一八四・九	一四〇、六三七・三	五、二六九・一	一、八〇三・九	二〇五、〇九一・五	二〇五、〇九一・五

考 備

一、本表は第十七次乃至第二十八次農商務統計表に據る。内明治三十三年度より四十一年度迄は有馬純男氏の記載(我國造林事業の大勢大日本山林會報第三百五十一號)に據り他は農商務統計表に據りて附加せり。

二、本表は主として本州四國九州の植栽面積と知るべし。

三、表中(天)を以て示したるは天然下種造林なり。

(完)

大正三年三月十二日印刷
大正三年三月十四日發行

杉檜の造林經營與付
定價金壹圓貳拾錢

著 者 狩野幸之助

發行者 三浦常吉

東京府豊多摩郡戸塚町下戸塚五九四番地

印刷者 渡邊八太郎

東京市牛込區榎町七番地

印刷所 日清印刷株式會社

東京市牛込區榎町七番地

發賣所

東京牛込早稻田
穴八幡坂上

三浦書店

振替東京二千三十番
電話番町三百番



産業書の目録は御申込
録は御申込
次第無代價
進呈可仕候

○三浦書店發行書、目錄

●三浦書店の抱負

本店は最大の書店たらん事を希はず
常に最良の書を出版せん事を思ふ

書名

定價郵稅共

●本多林學博士著述ノ大造林學	金八十一錢
造林學前論	金一圓五十二錢
總說及森林分布ノ原因	金五十六錢
日本森林植物帶論	金五十一錢
樹種ト立地トノ關係	金壹圓廿錢
總說及天然造林法	金八十一錢
種子及苗圃	金四十四錢
造林學本論	金六十一錢
植樹及播種造林法	金九十一錢
接木及挿木造林法	金一圓三十二錢
森林手入法及森林作業法	金二圓四十六錢
針葉林木及竹類椰子類篇	金七十六錢
闊葉林木篇	金七十九錢
續闊葉林木篇	金一圓六十六錢
副產物造林法	金二十二錢
行道樹篇附綠蔭樹	
本多林學博士 森林家必携	
本多林學博士 實用森林學上下貳冊	
同 民林改良法講話	

書名

定價郵稅共

農科大學 農林學通論	金二十九錢
農科大學 造林學本論	金八十錢
農科大學 造林學各論	金五十六錢
農科大學 森林保護學	金四十四錢
農科大學 森林學及林價算法	金六十三錢
農科大學 森林利用學	金五十一錢
農科大學 森林經理學	金七十三錢
農科大學 森林政學及森林法規	金四十四錢
農科大學 森林產物製造學	金六十一錢
農科大學 森林測量學	金四十四錢
農科大學 農林測量學	金六十一錢
農科大學 大日本老樹名木誌	金四十四錢
農科大學 大日本老樹番附	金十七錢

○三浦書店發行書、目錄

○大家の説を聞き其著書を讀むは既に成効の半ばなり

著者	書名	定價郵稅共
高橋農學士	農家寶典	金五十四錢
梅原寬重君	農家曆	金十六錢
山下與之助君	農學獨習	金八十八錢
阿野仁平君	農家の細君	金三十六錢
高橋農學士	接木と挿木	金四十六錢
神奈川縣農事試驗場	肥料成分改算表	金十二錢
田中芳男君	林産名彙	金七十六錢
農務省山林局	木材ノ工藝的利用	金六圓五十四錢
淵野林學士	林産物製造學 上卷	金七十三錢
農務省山林局	第二回林野講習會講演集	金七十五錢
上山山林局長	立木不動産法通解	金五十六錢
川瀨林學博士	公有林及共同林役	金一圓四十五錢
藤原康雄君	公有林野整理經營	金四十六錢
川瀨博士監輯	現行農林法規	金壹圓壹錢

著者	書名	定價郵稅共
植村林學士	林價算法及林業較利學	金壹圓六十二錢
戸澤林學士	丸太材積及製材量計算表	金八十一錢
漆山雅喜君	日本伐木製材及運搬法	金七十一錢
三村林學士	人工播種椎茸栽培法	金四十四錢
同	炭燒副産物製造法	金四十六錢
農務省山林局	林業年中便覽	金十四錢
廣瀨山林局技師	林業大意植林のすゝめ	金三十九錢
諸戶林學博士	測量教科書	金七十一錢
同	簡易測量學 一ヨリ五マテ	各金三十四錢
同	測量家必携	金五十四錢
同	經緯巨表	金八十六錢
渡邊林學士	世界樹木字彙	金八十一錢
狩野幸之助君	杉檜の造林經營	金壹圓卅四錢

發行販賣所

東京市牛込早稻田穴八幡坂上、下戸塚五九四番地

三浦書店

電話番町三百番 振替東京二千三十番

358
11

終